

目的を捉えた運営 を



明治大学英語部 110 代委員長 大城健

平素より大変お世話になっております。2019 年度明治大学英語部委員長を務めておりましたスピーチセクション 110th の大城健です。

2017 年春から英語部での活動を始め、来春に卒業を迎えることになりました。この 4 年間、英語部では今後大切な思い出になる様々な経験をさせて頂きました。このような経験をさせてくれたOBOGの方々をはじめ、先輩後輩、同期のみんなには本当に感謝しています。

さて今年は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により多くの活動に規制がかかることとなりました。私自身の話をしますと、就職活動において急に面接がオンラインに代替されるなど非常に戸惑う場面が多くありました。オンラインでは、面接官の表情を読み取ることが容易ではなく、自分の発言したことが果たして的確を射ているのか不安になる時が多々ありました。OBOGの皆さんにおかれましても、慣れないパソコンやアプリに試行錯誤することが多かったのではないのでしょうか。今後は、コミュニケーションの非対面化が進んでいくと思いますので、IT の知識を深めていきたいところです。

我がスピーチセクションでも対面で開催することが当たり前であった三上杯をはじめとする多くの大会が中止ないしは、オンラインでの開催を余儀なくされました。ほかのセクションも同じような状態だったと思います。このような状況下では、ただ例年通り大会等を開催するのではなく、大会の開催によってどのようなことを成し遂げたいのかという目的をより一層深く考えていく必要があると考えています。

思うに、近頃の英語部の活動において、責任者含むオーガナイザーが大会等の開

催にあたってどのようなことを目標にし、何を達成するのかという目的の議論を少々怠っているように感じられます。「去年もやったから、、、」「何十年も前から開催していて毎年やっていることだから、、、」このような理由で活動してはいないでしょうか。

話は変わりますが、私は高校時代野球部に所属しておりました。スポーツをする多くの部活動に当てはまることだと思いますが、部活動に熱心に取り組む目的、それは「勝つ」ことです。顧問の先生、またはキャプテンを筆頭に「勝つ」ために、部員は熱心に活動に取り組むことができます。私の野球部時代も甲子園出場を全員が本気で目指し、日々汗を流していました。ここでは、部員の目的意識の統一は比較的容易です。

しかし、大学の活動となると話が変わります。大学生は、勉強やサークル、バイト、留学等の様々な活動の選択肢があります。そのような中では、部員の活動における目的意識を統一させることは非常に困難になります。ある人は英語力上達のために英語部の活動に取り組んでいる人もいれば、ある人は友人のネットワークを広げるために活動している人もいるからです。

私が、運営側に立って感じたのは、まさにこれでした。部員全員を同じ方向に向かせて、目的意識を統一させる、これはどの活動でも運営者が頭を悩ませる課題であると思います。だからこそ、活動の目的をみんなですっきりと考えて活動する、これが部員のモチベーションを保ち、活動をより良いものにするために大切なことだと考えています。

大会の開催という手段でどのような目的を達成するのか、オーガナイザー・オーディエンスに等の活動に関わる人にどのような付加価値を与えていくのか、ここの議論を熱くしてほしいと感じています。簡単ではありますが、これが後輩に一番伝えたい思いであり、OBOGの皆さんには現役生が以上のようなことを実行できているかどうか見ていただきたいと思います。

最後になりますが、OBOGの方々におかれましては、いつも英語部の活動にご支援をいただきまして本当にありがとうございます。皆様のご支援があるからこそ、我々現役生の活動をスムーズに行うことができいております。現役生においても、自分たち以外にも活動のサポートをしてくれる存在がいることを忘れずに、活動に取り組んでほしいと思っています。これからの英語部が200年、300年と活動を継続することができるよう、ますますの発展を祈っております。